

**2073年、日本
に**

扉が開く音。

父「母さん、やっぱり子ども部屋にいたのかい」

母「ええ、父さんこそ真夜中にどうなさったの？」

父「母さんと同じだよ。息子の寝顔を見に来たんだ。明日の朝には行ってしまうからね」

母「見て、なんて幸せそうな顔。大人の仲間入りをすることが嬉しくて仕方がないのね。まだ幼すぎて旅立ちの意味なんてわからないもの、選択次第でわたしたちと会えなくなるなんて気づいてさえいないのよ」

父「その方がいい。前だけを向いて進む方が子どもらしい。置き去りにするものを振り返るのは、卒寮してからでも遅くない。すべての義務を終える時こそが、本当の旅立ちだから」

母「それにしても、どうして今年から13歳から15歳まで集団生活をするなんて法律ができたのかしら。どうして親と一緒に暮らしてはいけないの？」

父「気持ちは分かる。わたしだって息子と離れたくはない。しかし、集団生活を体験することは子供のためだ。分かるだろう？」

母「いいえ、分からない。分かりたくない」

父「いいかい、何度でも言うよ。子どものうちに基本となる生活を体験することが必要だ。それは勉強じゃない。働くことだ」

母「今までみたいに親元から中学校に通って、才能を伸ばすだけではどうしていけないの？」

父「夢を追って実現するのはすばらしい。誰もが憧れる。しかし、全員が成功するわけではない。失敗する人の方が多い」

母「わたしは息子の可能性を信じている。失敗を恐れるより挑戦させてあげたい」

父「わたしだって息子の可能性を信じている。しかし、一般的に成功者より失敗するのものの方が多いのも事実だ。理想と現実は違う」

母「子ども全般を考えたらそうでしょう。でもうちの子に限って失敗なんてないわ」

父「本当に才能があるなら、集団生活で失うことはない」

母「そうかもしれない。でも工場勤務だなんて子どもにはまだ早すぎるわ。体験学習で十分よ」

父「本気で働くことが必要なんだ。他人が使用するものをゼロから作ってこそ意味がある」

母「でも3年間、会えなくなるのよ。どうしてそんな風に冷静でいられるの。寂しくないの？」

父「寂しいに決まっている。だが比較する対象も無く、ただ夢を追う虚しさを子どもには味あわせたくないんだ。何を手にしても満足できず、何もかも失うことを恐れてただただ邁進する。帰る場所もなく、守るものも見えず、何のために生きているのか分からず、宙ぶらりんのままもがき続ける。そんな経験は要らない」

母「具体的な体験なら家庭こそ最上の場所よ。美しいものを見て、美味しいものを食べて、好きなこと嫌いなことを知っていく」

父「好みを知るだけでは駄目なんだ」

母「どうして駄目なの？」

母「父さん、黙り込んでどうしたの？」

父「どういえば母さんに伝わるんだろう？」

母「わたしには何のために作られたルールなのかさっぱり分からない。何が目的なの？」

父「すべてはつながっているんだ。仕事を創造し、国土を守る」

母「ますます分からなくなる」

父「徴労制度は、国土保全計画の一部でしかない。背後にはもっと大掛かりな国土再生計画がある」

母「山間部に人を配置してネットワーク化するというあれでしょう？」

父「そうだ。国土保護と食料生産を柱とする保護区の誕生だ。集団で分業し、山と田畑の手入れをする」

母「食事は給食として提供され、衣服と住居も支給されるそうね。安心だけど、思い通りに過ごす自由はない。わたしは嫌だわ」

父「個人の好みより、自然との調和を第一に考えるからね」

母「子どもたちが暮らす工場も保護区にあるの？」

父「いいや、ほとんどが管理区にある。しかし、原料を生産する施設は保護区にあるそうだ」

母「わたしの息子はどこに配属されるのかしら？」

父「最初にアンケートをとって、簡単な試験を行い配属を決めるそうだよ。保護区希望者は原料生産の仕事、工場希望者は管理業務、調理師希望者は給食作り、医者希望は助手など割り振りで考慮される。何の希望もなく、適性も認められない場合、ライン生産につくそうだ。ライン生産が一番人手が必要だからね。卒寮後の求人も多い」

母「配属された仕事が向かなかったらどうなるの？」

父「空きがなければ転属できないらしい。昇進はあるが、配置転換はほとんどないそうだ。同じ職場で3年間勤め上げることになる」

母「まあ大変、わたしの息子の実力が認められなかったらどうでしょう？」

父「工場勤務は遊びではない。仕事だ。好きな仕事を体験するためにあるわけじゃない。苦手なことでもやり抜くことでスキルが身につくという考えだ。職業より集団で働くということに重きを置いている」

母「いずれ働かなければならないのは分かる。でもこんなに幼いうちから現実を突きつけられる必要があるのかしら？」

父「現実こそが付き合わなければならない世界だ。勉強ができて、現実と向き合えなければ何者にもなれない。たとえば金銭労働で一番難しいのは、受注した仕事をやり遂げることじゃない。受注することだ。もし確実に仕事になると分かっているなら、安心して働くことができる。作り慣れたものを作り続ける安定した暮らしができる。しかし、必要とする相手が見つからなければ、どれだけすぐれたものでも価値はない」

母「確かにそうだけど、でも……」

父「今まではお金を配ることがセーフティネットになっていた。しかし、弱者ほど医療費など出費がかさむものだ。買い物も大変な労働になる。お金を配るだけでは解決できない。生き抜く仕組みを作ることが大切だ」

母「不便な山間部ではそういう仕組みも必要かもしれない。でもどうして子どもたちを一か所に集めて働かせるの？」

父「同じ仕事をみんなでやり遂げるという機会こそが大切なんだ。世代を超えて誰とでも打ち解けるきっかけになる」

母「働くだけなら、家から通えばいいじゃない」

父「20歳になっていきなり放り出されるより、13歳で生活に必要な雑用をこなす方がいいんだ。いずれ担わなければならないのだから」

母「予行練習なんてしなくて大丈夫よ。何をそんなに心配しているの？」

父「親は子どもより先に死ぬ。いつでも助けられるわけではない」

母「嫌だわ。どうしてそんな風に最悪な結果ばかり考えるの？」

父「それがリスク管理というものだ」

母「最悪に備えても、最高の生き方はできないわ。安全ばかり考えるなんてばかげている」

父「問われているのは生き方なんだ。自由か、平等か。より良くを求めて自由に生きるか、同じ明日が保証された平等な暮らしを望むか」

母「誰だって自分の好きなように生きたいはずよ。自由で平等な暮らしを望むわ」

父「自由と平等、それは実現されない夢だ。机上の空論だ。何千年もかかって無理だという結論を出した。集団生活が嫌なら自活を目指せばよい。自活が無理なら集団の一員として生きればよい」

母「なぜ両立できないの？」

父「みんなで同じ目標を共有するから、すべきこと・すべきでないことがはっきりする。すべきことが終われば一人の時間を楽しむことができる。結果的に平等な暮らしが実現する」

母「変化があっても目標が変わらないから、同じ暮らしが続くのね」

父「そうだ。しかし自由を認めれば、それぞれバラバラな目標を持つことになる。すべきこと・すべきでないことは曖昧になる。競争に勝とうと思ったら、すべきことが際限なく増える。必然的に自由な時間も自由ではなくなる。勝つために全力を投入しなければならない。常に走り続けなければならない。そんな風に競争に勝って国を守る人も必要だ。しかし、両立はできない。競争している隣で平等な暮らしを目指せば、確実に平等な暮らしを選んだ人が損をする。だから区域を分けて法律で守るんだ」

母「家族ではどうしようもないことなの？」

父「かつては、家が平等な環境を提供していた。けれど近代化の過程で核家族に細分化され、機能を失ってしまった。今さら、血縁で結び付いた家族制度を復活させることは難しい。どこにも所属できない人が出てきてしまう。だから自給自足できる大きさの集団を作ってネットワーク化することにしたんだ」

母「3年間働いて卒寮すれば、保護区で暮らす資格が得られるそうね」

父「そうだ。いざとなったら、行く場所がある。家族以外に頼れるものがある。そう思えば、失敗は怖くない。思い切って挑戦できる」

母「何を言っても結局、朝にはわたしの息子は行ってしまふのね」

父「ああそうだ。しかし、一回り大きくなって必ず帰ってくる。自由区に来て、わたしたちの商売を手伝ってくれるさ」

母「そうなるといいけど、もし山間部興味を持ったらどうしましょう？ 永遠の別れになりかねない」

父「将来を選択する権利は、本人に与えられている。息子の選択をわたしは認めよう。わたしだって、親の仕事を継がなかった」

母「やめてちょうだい。きっとわたしたちのところへ帰ってくるわ。帰ってきますとも」

父「そうかもしれない。わたしには分からない。ただ後悔のない一生を送ってくれればいい。そう思うだけだ」

母「そうね。離れていても親子は親子。絆が切れるわけじゃない。たった3年ですべてが変わるなんてありえないわ」

父「いつかは飛び立たなければならないんだ。先延ばしにして自立しそこなうより、思い切って飛び込ませた方がいい。早ければ早いだけ、わたしたちも若い。少しでも助けることができるかもしれない」

母「ええ、そうね。そうかもしれない」

父「さあ、もう寝よう。明日の朝は早い」

母「そうね。おやすみ、わたしのかわいい子」

父「おやすみ、わたしたちの息子よ」

扉が閉まる音。